

御船町立御船中学校 研究発表会

【研究主題】

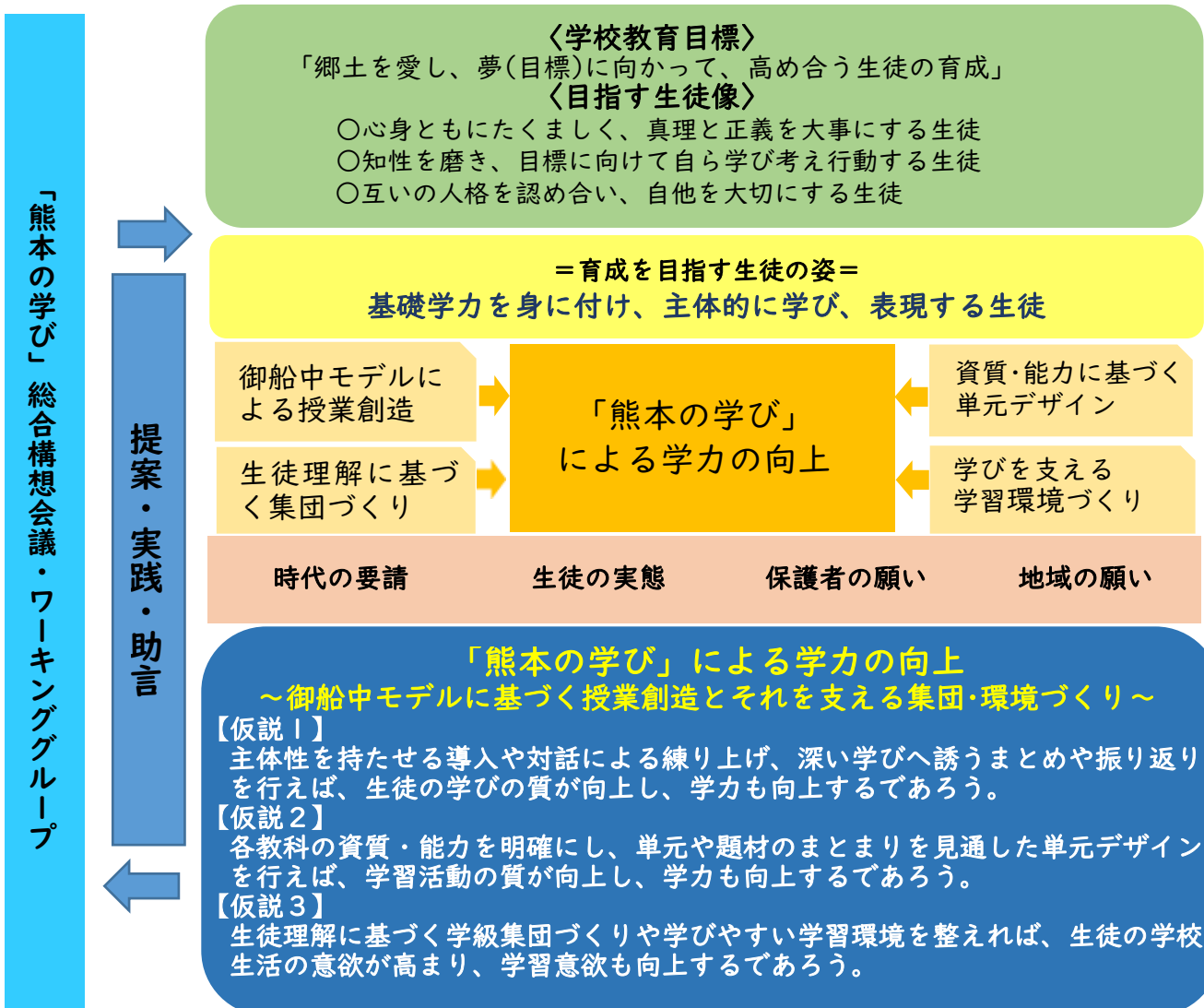
「熊本の学び」による学力の向上

～御船中モデルによる授業の創造とそれを支える集団・環境づくり～

御船中学校では、昨年度から熊本県教育委員会の研究指定校として授業づくりや指導方法の工夫・改善、及びそれらを支える集団づくりや環境づくりについて研究を重ねてきました。今年度は、「『熊本の学び』による学力の向上～御船中モデルによる授業の創造とそれを支える集団・環境づくり～」を研究主題に定め、今後の「熊本の学び」を展望しつつ、さらに主体的・対話的で深い学びの実現を目指して全職員で研究を進めているところです。

本日、これまで取り組んできた内容を発表いたします。研究はまだ道半ばであり、大きな成果が現れたと言える段階ではありませんが、今後も指導方法の工夫・改善を通して「熊本の学び」の推進に向けて子供たちの学びの質を高め、確かな学力の向上につなげていきたいと考えています。

Ⅰ 研究の構想

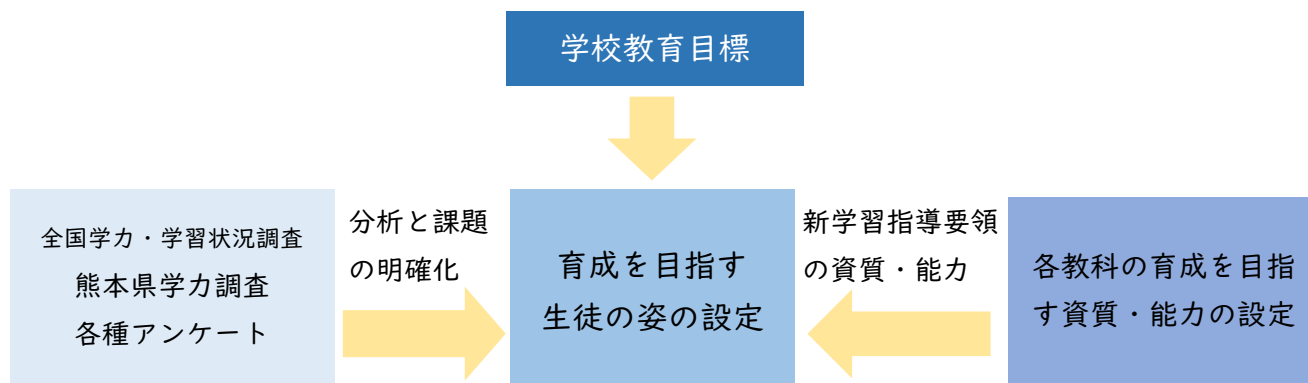


2 研究の実際

(1) 授業づくり部会

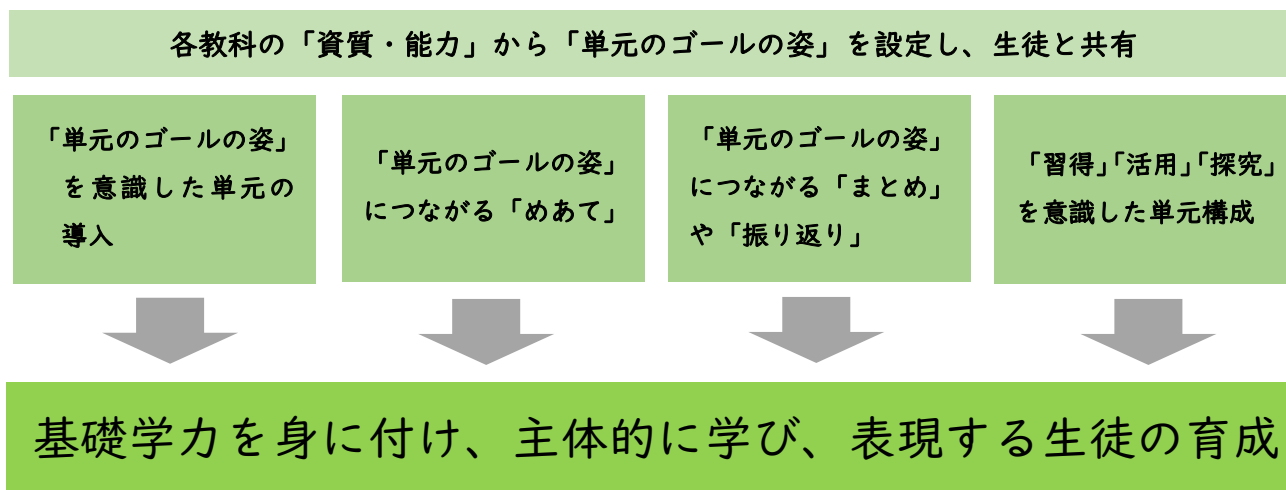
① 「育成を目指す生徒の姿」の作成と「各教科で育成を目指す資質・能力」の整理

カリキュラム・マネジメントの視点から、学校教育目標を基に本校の「育成を目指す生徒の姿」を設定した。設定に当たっては、これまで実施された全国学力・学習状況調査や熊本県学力調査、NRT及び生徒アンケートの結果を分析し、明らかになった課題を職員で共通理解して各教科で改善策を探った。この「育成を目指す生徒の姿」を各教科の授業で具現化していくために、新学習指導要領を踏まえた「各教科で育成を目指す資質・能力」を設定した。設定に当たっては、新学習指導要領で示された育成を目指す資質・能力の3つの柱や授業改善の視点で整理し、学校教育目標と「育成を目指す生徒の姿」の実現を目指す内容とした。このような取組を重ねたことにより、各教科や各単元を通して身に付けさせたい資質・能力と各授業における「本時の目標」が明確になり、「めあて」や「まとめ」「振り返り」を行う際に大きな役割を果たした。(資料集に「各教科で育成を目指す資質・能力」を掲載しています。)



② 単元や題材の内容や時間のまとまりを見通した単元のデザインと単元の構想案

学びの質を高め、主体的・対話的で深い学びを実現するためには、単元のまとまりを見通して「習得・活用・探究」の学習過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる必要がある。特に本校の実態として、主体的に学習に取り組む態度を育むことが必要であった。そこで「単元のゴールの姿」を各教科の授業で設定し、生徒と教師が同じゴールを共有して毎時間の授業を組み立てることで、生徒の学習に対する主体性の向上を図った。



③授業公開週間の取組

全職員による授業公開週間に取り組んだ。その際に、単元指導計画や単元のゴールの姿を明記した学習構想案を作成した。さらに、単元指導計画の中に「主に習得」と「主に活用」のどちらに重点を置いた授業かを明示した。また、授業づくり部会を中心に作成した授業モデルを活用し、基本的な授業の展開モデルとして全職員で共有し、授業に臨んだ。

学習構想案 1年数学「正負の数」

単元名	第1章 正負の数(東京書籍 P8~)		
単元の目標	正の数と負の数の必要性と意味を理解し、具体的な場面で正の数と負の数を用いて表したり処理したりすることができる。また、算数で学習した数の四則計算と関連づけて正の数と負の数の四則計算の方法を考察し、表現することができる。		
単元指導計画と評価計画(25時間扱い 本時 10/25)			
【単元の中心的な学習課題】 正負の数の四則計算ができ、それを具体的な場面で活用しながら課題を解決する。	【単元的主要な学習方法】 四則計算の方法を考察し、処理できるように練習する。また身につけた計算を身の回りの課題に結びつけ、解決する。		
【単元のゴールの姿】 正負の数の四則計算ができ、それを日常生活の具体的な場面で正負の数を使って表したり処理したりしようとする生徒			
1 (主に習得)	2 (主に習得)	3 (主に習得)	4 (主に活用)
○身の回りの事象から負の数の意味と必要性を理解する。 【具体的評価規準】(知識・理解) 正の数、負の数、自然数があるか説明し、例示することができる	○正負の数が反対の方向や大小を比較したりすることができることを理解し、それらを用いて課題を解決することができる。 【具体的評価規準】(技能) 反対の性質や大小の比較を正負の数を用いて処理している。	○正負の数の大小を数直線を使って考え、数の大小を不等号を使って表すことができる。 【具体的評価規準】(技能) 数直線を使って正負の数の大小を考え、その関係を不等号を使って表すことができる	○絶対値の意味を説明し、それらを使って数の大小を不等号を使って表すことができる。 【具体的評価規準】(技能) 絶対値の考え方をもとにして正負の数の大小を考え、不等号を使って表すことができる
5 (主に習得)	6 (主に習得)	7~9 (主に習得)	
○東西の移動をもとに正負の数の加法の意味を理解し、同符号の加法と異符号の加法の違いに気づく。 ○正負の数の加法が計算できる ○正負の数で交換法則や結合法則が成り立つことを理解し、それらを使って効率よく和を求めることができる。 【具体的評価規準】(技能)	○正負の数の減法は、加法になおして考えることができる。 ○正負の数の減法を加法になおして計算し、差を求めることができる。 【具体的評価規準】(技能) 正負の数の減法を加法になおして差を求めることができる。		

「授業モデル」(主に習得)

本時の目標		単元デザインから設定した本時の目標		
時間	過程	学習活動	評価及び教師の手立て	備考
10分	導入	「なぜ」「おそらく」を引き出し、〈主体的な学び〉へと向かう ○前時の復習 ○既習事項の確認 ○「問い」や「疑問」を持つ ○めあての確認	○前時の基礎的な知識・技能の確認 ○生徒が問いを持つ しかけ ○めあての提示	メニューボードを活用して見通しを持たせる
	展開	「やってみよう」「きっと」を引き出し、「分かった」を実感する ①個人で取り組む ②ペアや全体で取り組む ③全体で確認する ※思考スキル・思考ツールを活用する	課題を提示する ○新たな知識・技能を発見したり、思考や表現を促したりする問題 ○作業・制作などの学習活動	ICTや視聴覚教材等を利用して、提示を工夫する
	程度	「分かった」という実感を持たせ、生徒の言葉で「まとめ」る ○「何が分かったか」が授業の中盤に置く ○学習課題に対する「まとめ」を行い、「分かる」という実感を持つ ○思考スキル・思考ツールを活用して、「思考の可視化」を図る		
15分	終末	〈対話的な学び〉を通して習得へと向かう 本時を振り返る ○適用問題を解き、知識・技能の習得・定着を図る ○分かったこと・できるようになったことを伝え合う ※次時の目標を持つ	振り返りに対する「価値付け」を行う ○生徒の発表を認め・褒めて価値付ける ○次時への見通しを持つ	本時の目標に沿い、評価を行う

導入部分では、生徒が「問い」を発するような工夫を行うことで、学習に対する主体性を高めることができる。

○適用問題を解いたり、分かったことなどを伝え合ったりする。
○自らの学びを実感し、それらを生活や次の学習にどう生かすかなどを考えることができる。

授業の中盤あたりに「まとめ」を位置付けることで、知識・技能の「習得・定着」の時間を設定することができる。

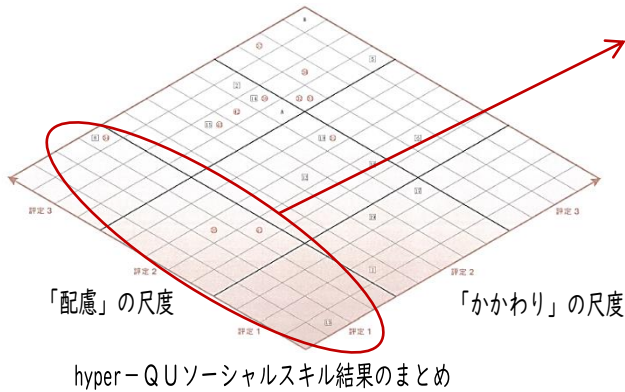
「授業モデル」(主に活用)については、資料集に掲載しています。

(2) 集団づくり部会

○安心と信頼を基盤とした高め合う学級づくり

①hyper-QUを活用した学級エクササイズ

朝の会を活用し、学級でエクササイズを実施している。司会進行を生徒が行うことで、生徒の主体性を育むと同時に、教師はhyper-QUにより明らかになった「配慮」や「かかわり」のスキルにおいて支援が必要な生徒への個別の支援を行うことができる。



「かかわり」のスキルが低い生徒を事前に理解しておき、「かかわり」に関する場面で、教師が個別に支援する。



学級エクササイズの様子
活動名「どっちがいい?」

②ソーシャルスキルトレーニングを取り入れた学級活動

生徒の実態から、本部会が目指す学級集団づくりに向けて、ソーシャルスキルの育成が必要と考え、学期に1回、学級活動の時間にソーシャルスキルトレーニングを実施している。

各種アンケートの結果や生徒の実態などを踏まえた上で、ターゲットスキルを設定し、各学年部で共通実践している。また、右の写真のように養護教諭やSCがゲストティーチャーとして授業に入ることで、自己理解や他者理解について理解を深め、ソーシャルスキルトレーニングとの相乗効果を図っている。



「自分析のスキル」の養護教諭(SC)によるインストラクション

③主体性を育む生徒会活動

本校が育成を目指す生徒の姿の中でも特に「主体的に学び、表現する」生徒の育成を意識し、生徒自らが活動の見通しを立て、実践、評価、改善を行う検証改善サイクル(PDCA)を取り入れている。重視していることは、生徒会テーマを軸にした活動を計画・実践することと、生徒会アンケートの活用である。

また、学級づくりと関連させ、学級での生徒会活動や話し合い活動の場を毎月1回以上設定し、「主体的に学び、表現する」生徒の育成を目指している。



改善に向けた話し合い



改善案の実践

A



年間計画の立案



生徒総会に向けた学級生徒会

P



生徒会アンケートの集計・考察



集会で結果を報告

C



生活委員会による正門-礼チャレンジ



図書委員会によるブックトーク

D

主体的に学び、表現する生徒の育成

(3) 環境づくり部会

○学びやすい教室と学習環境づくり

①刺激量の調整

黒板には掲示をせず、前の棚にはカーテンを付け、壁面の掲示は必要最低限にとどめ、視覚による刺激を減らしている。

②メニューボードの掲示

写真の黒板右横のホワイトボードに授業の内容・流れを書くことで時間を構造化し、生徒に共通しを持たせる。

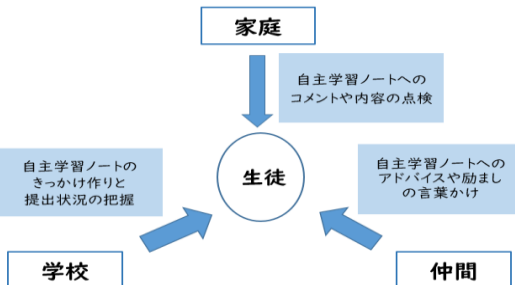


○自ら計画を立てて学習できる生徒の育成に向けた取組

家庭学習に関するアンケートを実施したところ、「家庭学習の計画を立てていますか。」という質問に対しては約40%の生徒が「あまりしていない」「まったくしていない」と答えており、「自主学習の内容は決めていますか。」という質問に対しても約35%の生徒が「あまり決めていない」「決まらずに困っている」と答えている。そこで、生徒たちが主体的に家庭学習に取り組むための動機付けとして「家庭学習強化週間」を設けた。月に一度、家庭学習強化週間を設定し、帰りの会の時間を活用して学習計画の立て方や学び方を促すなど、家庭学習の充実を図っている。

【家庭学習のイメージ図】

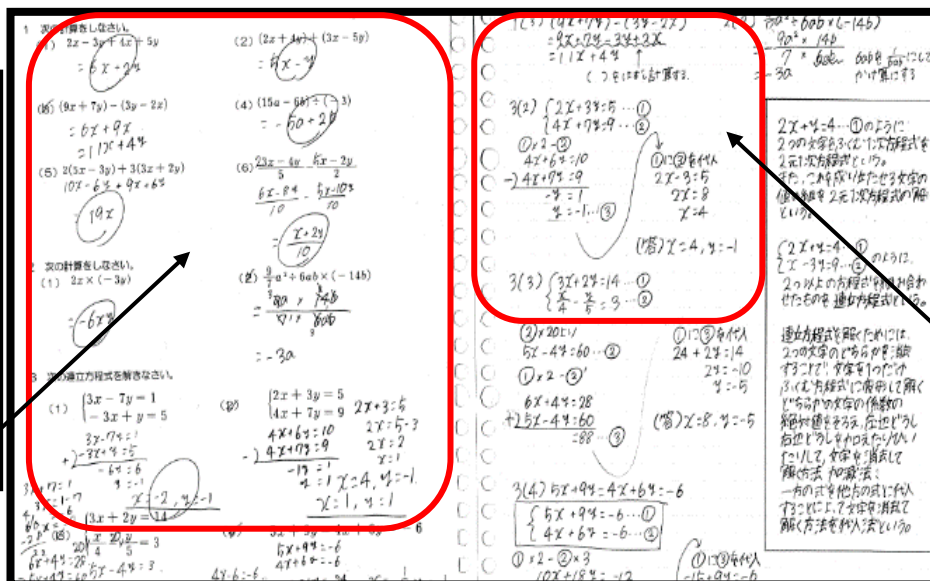
下図のように、生徒が家庭学習に主体的に取り組むためには、学校と家庭の連携や生徒同士でのアドバイス、励ましが必要であると考え、共通理解を図った。



生徒同士で前日の自主学習ノートの評価をした後に、10分間の自主学習に取り組む



各教科で基本的な学習内容のプリントを作成し、家庭学習へのきっかけとなることを目指している。



家庭学習強化週間のプリントを生かした自主学習ノートの例

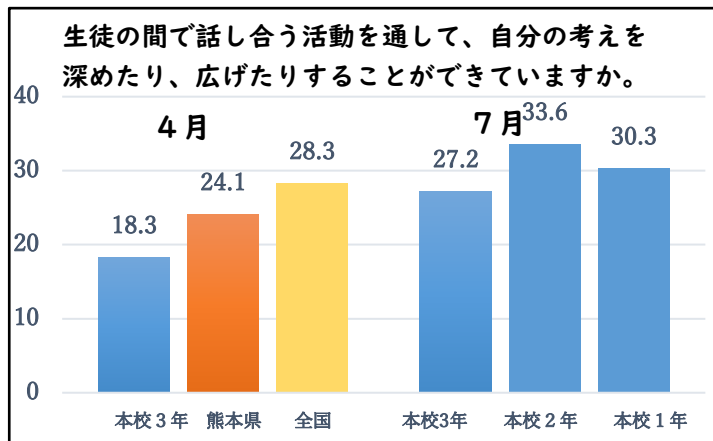
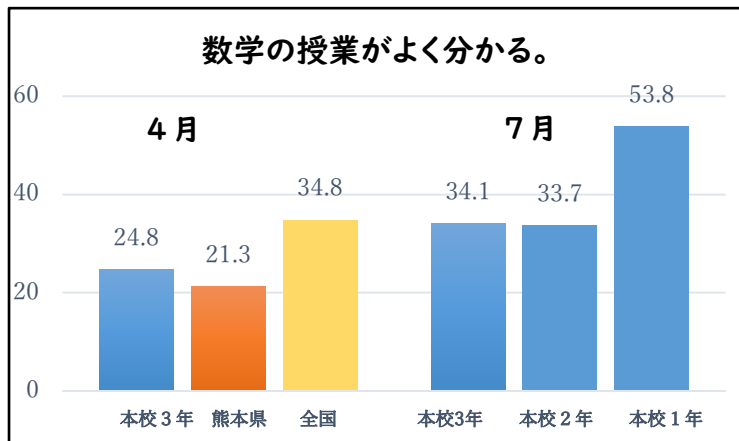
帰りの会で終わらなかった問題は、自宅に帰ってから更に学習を進めている。

基礎学力を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成

3 成果と課題

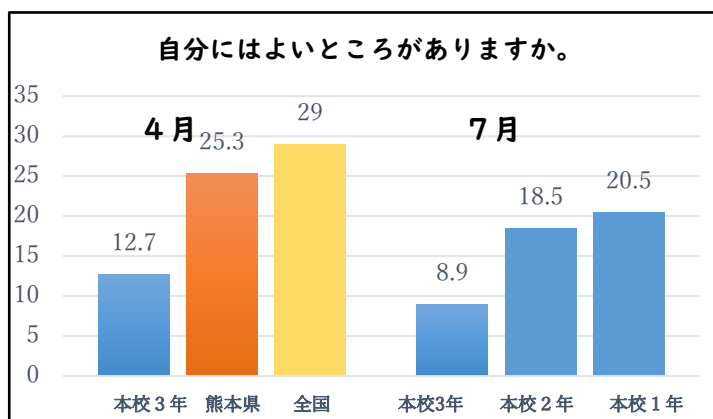
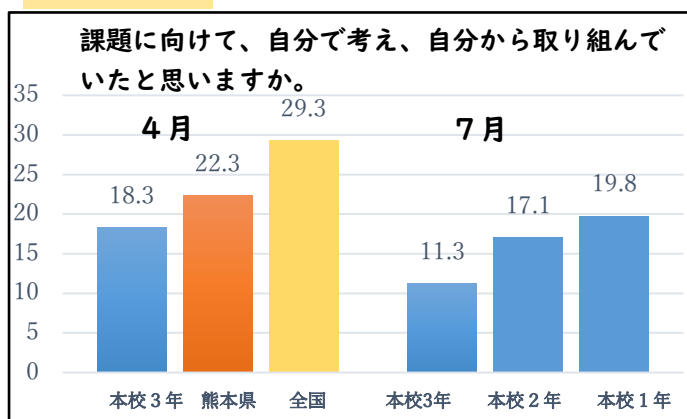
(1) 成果

全国学力・学習状況調査（H31.4月）の生徒質問紙調査と、同様のアンケートを7月に行った。結果は以下のとおりである。（「当てはまる」や「そう思う」と答えた生徒の割合）



- 授業づくり部会で取り組んだ授業モデルの実践や、その中で行ったまとめや振り返りの位置付けなどに取り組んだことで、生徒にとって「分かる・できる」が実感できる授業が展開できるようになった。特に数学では大きな数値の向上が見られているが、他の教科に関しても同様の向上が見られている。
- 集団づくり部会とともに取り組んだ学級づくりと授業で行っている対話による練り上げを各授業で取り入れたことで、友人の考えに積極的に耳を傾け、自分の考えと比較したり広げたりすることができている。

(2) 課題



- 主体性を持たせるための単元や授業の導入を工夫しているが、生徒の主体的な学習にまで高まっていない。また、「自分にはよいところがありますか。」という自己肯定感を問う設問の値が低くなっている。この2つの結果は、自己肯定感が低いことが、課題に主体的に取り組めない原因ではないかと推測される。今後も継続して自己肯定感を高める学級づくりや学校行事など生徒が活躍する場面を増やし、学習面での生徒の頑張りを教師側がサポートしたり声かけをしたりすることで、さらに自己肯定感を高めていきたい。
- 家庭学習に1時間以上取り組んでいる生徒の割合が全国平均や熊本県の平均にまで達していない。今後も生徒が主体的に取り組むための単元や授業づくりについて研究を深めるとともに、自主学習ノートの活用方法を工夫したり、保護者からのコメント等をもらったりして家庭との連携を深め、生徒が主体的に学習に取り組む導入の工夫や、自ら計画を立てて家庭学習に取り組むための手立てを講じていきたい。